

分子の1を問い直す

—「幻想されたアイデンティティ：日本における他性、混血および人種」解説

櫻井典夫

リュシアン＝ロラン・クレルク「幻想されたアイデンティティ：日本における他性、混血および人種」は、父母のどちらかに外国籍の親を持つ子供たちの日本社会における表象について論じたものである。

加速度的に増加する超国家的な人の動きに伴い、近年の日本社会でも顕著となったこの現象については、既に多くの先行研究があるばかりでなく、これまで日本社会で周縁化されてきた当人たちが、自らの手による新たな社会的位置づけを目指し、様々な媒体を通じた表現活動を行って来ている¹。

「幻想されたアイデンティティ」もこうした先行研究や諸々の表現活動を思考の基盤とすることは原注を見ても明らかであるが、管見によればこの論文は、「混血児」や「ハーフ」という言葉に注目しながら、その定義づけを目指すよりはむしろ、それらの言葉が生成されたプロセスを歴史的・社会的背景の中で浮かび上がらせようとする点に於いて、また、それらの言葉と日常生活の相互の影響を探るという点に於いて、下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」—ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』（青土社、2018年。）に読み取れる手法と問題意識とを共有しているといえるだろう。

そのうえで「幻想されたアイデンティティ」の特徴を述べるとするならば、「ハーフ」を主題としながらも、その関心は「ハーフ」たちのアイデンティティそのものではなく、むしろそれを表象する「日本人」のアイデンティティに向けられているという点が挙げられる。「日本人」が、日本社会における包摂と排除を行ううえで暗黙の前提とする「日本的なもの」について、人類学的見地よりその再考を促すことがこの論文の主要な目的なのである。

本解説のタイトルにある「分子の1」という言葉もまた、「ハーフ」という言葉の受容において暗黙裡に前提とされた「日本的なるもの」を筆者（櫻井）なりに言い直したものであるが、その具体的な説明に先立ち、まずは「幻想されたアイデンティティ」が執筆されるに至った経緯を説明することより開始したい。

街角の人種主義—「幻想されたアイデンティティ」の執筆経緯

「幻想されたアイデンティティ」の筆者リュシアン＝ロラン・クレルクは2005年に給費留学生として来日して以来、北海道をフィールドとしながらアイヌ文化を精力的に研究し、10年以上に渡るその研究成果の一部はフランス社会科学高等院（EHESS）に提出された博士論文「日本におけるアイヌの社会文化的変容」にまとめられている。

かつてアイヌは、ロシアの脅威という対外関係を主な理由として日本政府から急速な同化を迫られる一方で、「旧土人保護法」（1899）などの制定を通じて日本社会への完全な包摂は

拒まれるという形で二重の暴力に曝されることになった。植民地主義的な政策のもとで推進された和人の流入は北海道に新たな社会の出現をもたらし、それはアイヌの生態学的・社会文化的基盤に大幅な修正を求めることにもなった。さらにその過程において、アイヌからの収奪を正当化するため、アイヌの歴史性は植民者たちによって否定されもした。

しかし、自らの社会を襲うこうした変動の数々に対し、アイヌは決して受動的であったわけではない。1960年代以降になると、アイヌは自分たちと同様の試練に直面した世界の先住民との連携のもとで、断片化された自民族の過去を探求する作業を開始する。この試みは過去を復元するために、あるいは過去が消失した理由を解明するために不可欠のみならず、多数派とは異なる歴史と出自とを拠り所にした政治的要求を行うためにも不可欠であった。先住権の獲得とその適用を求める長い闘争の最中、2008年6月6日にアイヌ民族を先住民族とすることを求める決議が衆参両議院で採択されるに至ったが、それでもなお、アイヌが自民族たちの過去の探索を止めることはないだろう。アイヌはこれまでも、そしてこれからも、自己の歴史とアイデンティティの定義を絶えず更新し、洗練しようと努めているのである。

このように、急激な社会文化的な変容と度重なる異文化受容の試練に対して発揮されるアイヌの闘争性と強靱な抵抗力、並びに他の先住民族たちが世界中で繰り広げている政治的・文化的闘争にヒントを得て練磨された戦術等を、アイヌ民族による歴史とアイデンティティの(再)構築の特徴として浮かび上がらせたうえで、それを肯定的に評価することが論文「日本におけるアイヌの社会文化的変容」の狙いであった。

フランスにおける日本学の泰斗オギュスタン・ベルク (Augustin Berque, 1942-) の指導のもとで完成されたこの論文は、コレージュ・ドゥ・フランス教授の人類学者フィリップ・デスコラ (Philippe Descola, 1949-) を主査とする審査員たちの称賛のもとに受理された。これによってクレルクは、フランス社会科学高等院の博士号を取得するとともに、その年の最も優れた日仏研究に与えられる渋沢クロード賞を受賞することになった²。

こうして今日では名実ともにフランスを代表するアイヌ研究者としての地歩を固めつつあるクレルクが、雑誌『コミュニケーション』の要請に応える形で執筆したのが《L'identité fantasmée : altérités, métissages et races au Japon》であり、「幻想されたアイデンティティ：日本における他性、混血および人種」はその日本語訳となる。

『コミュニケーション』とは、社会学者のジョルジュ・フリードマン (Georges Friedmann, 1902-1977)、哲学者・批評家・記号学者のロラン・バルト (Roland Barthes, 1915-1980)、哲学者・社会学者のエドガール・モラン (Edgar Morin, 1921-) といった多士済々なメンバーを中心に1961年に創設された雑誌であり、マスコミュニケーションに関する先駆的な研究や優れた記号学的分析によってすぐさま世界的な名声を博すことになった。この雑誌はまた、著名な研究者のみならず若手研究者による未発表原稿も多く掲載することをその特徴とし、それを通じて新たな研究領域を拡大するとともに、学際的な研究の活性化にも貢献している。

その『コミュニケーション』107号（2020年発行）において、歴史家アンドレ・ビュルギエール（André Burguière, 1938-）監修のもと、「人種と人種差別」という特集が組まれることになった。

今日、グローバリゼーションのもたらす社会的不平等へのルサンチマンを伴いながら、差別主義が世界中で再興の兆しを見せている。その差別主義の下支えとなる人種主義の根は古く、血縁関係に基づく古代の社会的紐帯に求められる。18世紀に至るまで庶民と支配者の関係は血縁関係をもとに形成されていた。日常よく接する人々は「同胞」とみなされ、それ以外の人々、つまり「よそ者」と対置されていた。工業化／都市化の進展に従い、血縁の結びつきが匿名的な暗がりへ落ち込んだ後、19世紀に至り古代の社会的紐帯に取って代わって表れたのが、国家・階級・人種という不可視の団結であった。19世紀後半の四半世紀になると、フランスやイギリス、ドイツを中心に花開いた科学的議論と研究の成果として、人種主義が登場する。人種主義というのは、無知から自然発生的に生まれるイデオロギーではなく、植民地化された人々とその文化を劣等人種に属すとみなす野蛮な理論の集積として姿を現したものであった。その科学的基盤が完全に否定されているイデオロギーやドクトリンが今日もなお残存していること、そればかりか新たに生まれさえすることをどう説明できるのか？この謎を解くために、まずは身近な差別、街角の差別の研究から開始しよう、私たちに身近で、私たち自身の社会の内部で、とりわけスポーツやファッション、メディアの領域で表明されている差別主義を。

以上が特集「人種と人種差別」への投稿を募るアンドレ・ビュルギエールのメッセージの要約であり、「幻想されたアイデンティティ」はその要請に文化人類学的見地より応える目的で執筆されたものである。

ビュルギエールが述べるように、植民地主義と人種主義は19世紀に花開いた「科学的基盤」のもとで強固に結びついていた。文化人類学もまた、その「科学的基盤」の一つとして、「他者」を差別し、支配するための論理的根拠を提供してきた。その反省もあり、今日では「他者」の包摂と排除を巡る問題そのものが人類学的研究の主要なテーマになっている³。この問題はクレルクが専門とするアイヌとも無縁ではない。アイヌ民族もまた、植民地化の過程において包摂と排除の問題に直面せざるを得なかったためである。今日も耳にする「純粋なアイヌはいない」といった類の言説は、この問題の根深さを端的に示すものであろう。

たしかに「幻想されたアイデンティティ」においてアイヌの問題は直截的に扱われてはいない。しかしその内容をみれば、クレルクが「ハーフ」という言葉の使用にアイヌの差別と通底する問題の構造を見て取っていることは明らかである。「スポーツやファッション、メディアの領域で表明される差別主義を考察する」という企画の趣旨に忠実に応えるように、「ハーフコスメ」や大阪なおみ、ラグビーワールドカップといった巷間に流布する話題を取り上げて、日本社会における「混血」の表象が、魅惑と拒絶のあいだを揺れ動く様を描き出しながら、クレルクは、日本人がそのアイデンティティの構築にあつて無意識裡に採用する単一的・均質的で純粋な「日本」という「幻想」と、アイヌや「ハーフ」に対する差別を生

み出すメカニズムとを浮かび上がらせていくのである。

「ハーフ」の受容を容易にする「単一民族論」的発想

「ハーフ」という言葉は今日、その定義や使用の可否、あるいは「ハーフ」と呼ばれる人々自身のアイデンティティの構築といったさまざまな問題を提起するものであるが⁴、そもそもこの「ハーフ」という言葉は、1970年代に起きた「ハーフ・ブーム」を媒介に日本社会に定着したといわれている。1970年にアイドル・グループ「ゴールデン・ハーフ」が登場したのを皮切りに、高度経済成長期を迎えた日本社会の中で商品戦略と結びついた「ハーフ」表象は、これまでの「混血」イメージを一新させながら、大衆に迎えられていったのである⁵。

一方、「ハーフ・ブーム」が起きた1970年代、「ハーフ」と並ぶ「大衆消費財」の一つに「日本人論」があった⁶。国際社会における日本の存在感が高まっていたこの時代、自分たちが世界からどう見られているのかという自意識が「日本人」たちの中に強まっていた⁷。こうした状況のなか「世界に冠たる経済先進国として誇れる自画像」（ハルミ・ベフ）として「文化識者」たちが描き出す数多の日本人論は、大衆の潜在的な欲望を大いに刺激し、空前の「日本人論」ブームを巻き起こすことになったという⁸。

多くの日本人論は、「日本人」の勤勉性や団結性、自然性、素朴さといったものを称えるにしる、公共性の欠如や閉鎖性を批判するにしる、「日本人」がいかに特殊で太古から同質だったかを強調する点では同じ⁹であり、その「日本人」表象の特徴としては、「日本人の血」という人種的メタファーによる「日本人の境界策定」、「単一民族」としての一体感や家族的なつながりの強調、「単一民族社会観」に基づく日本人の「本質化」、「日本人」と「外国人」の単純化された二分法などが挙げられている¹⁰。

このように、1970年代に流行した日本人論の多くは「日本人」を「単一民族」とみなす発想の上で構成されていることが指摘されているが、その発想自体はこの時代になって初めて登場したものではない。単一民族論は、それに対抗する混合民族論と共に、古くから存在していたのである。

単一民族論とは、日本には太古から日本民族が住みその血統が続いてきたとする主張であり、混合民族論は、日本民族は後来の征服者と先住民族その他の混合であるとする主張である。このうち戦前にあって優勢であったのは混合民族論であった。日本が積極的に対外進出を続けていたこの時代、異民族統治のために都合なのは混合民族論を採用することだったためである¹¹。そのため「多くの国体論者たちは、天皇統治が権力支配でなく家族の情であるという論理を朝鮮や台湾にまで延長しようとし、混合民族論をとりいれて、被支配民族も日本民族と血縁関係にあると主張していった¹²」。しかし、第二次世界大戦に敗北した結果、戦前の軍事的な多民族帝国にかわり、単一民族の平和を主張する論者が台頭した。その理由の一つとして、「異質なものを含まない、またそれゆえ平穏な島国という日本の自画像は、戦争に疲れた人々の心をとらえる力をもっていた¹³」ことが指摘されている。こうして

1960年代になると、本来否定的に用いられていた「単一民族」という言葉が肯定的な意味を持ちながら日本社会に定着していくことになった¹⁴。

こうしてみると1970年代に起きた日本人論ブームは、単一民族論が支配的となる潮流の中で生じたものだといえるだろう。しかし、たとえそれが平和への願いに裏打ちされていようとも、単一民族論や単一民族論的発想のもとで構成された日本人論は諸々の問題を孕んでいることに変わりはないだろう。

そもそも戦前に優勢であった混合民族論に対し、単一民族論支持の中核を担ったのは優生学と人種思想の信奉者であった。彼らは優等な支配民族の血が劣等な被支配民族との混血によって汚損されてはならないという発想のもと、同化政策を支えていた混合民族論に対抗しながら独自の単一民族論を準備していった。その代表格である清野謙次と長谷部言人は、混合民族論に支えられ推進される皇民化政策に反発するなかで、日本民族の純血性を強調する論調へと傾斜していった。その後清野と長谷部の学説は、戦後の人類学における定説を形成し、単一民族神話の成立に重大な役割を果たすことになったのである¹⁵。

長谷部は、列島の「石器時代人ハ即チ日本人」であり、その文化は「極メテ特殊ナルモノ」で「近代ノアイノ或ハボルネオノダイヤク等」に比べて「優越」していたと主張しているが¹⁶、この発言からも読み取れるように、単一民族論はその起源において人種主義的発想と密接に結びついていた。ところが単一民族論を下敷きとした日本人論では、「日本人」＝「単一民族」、「同質民族」＝「人種差別はない」という言説の節合により、人種差別の構造がその視野から完全に抹消されている。「これらの日本人論は、「日本人」の特殊性や単一性を強調するため、その論拠を揺るがす存在を不可視化する傾向を」持ち、そこでは「混血児」の存在のみならず、沖縄やアイヌ、日本列島の各地にある文化的・言語的多様性も捨棄され、単一の「日本人」像が表象されることになるのである¹⁷。このように単一民族論に基づく日本人論は、差別の対象そのものを不可視化することにより、差別の構造そのものを隠蔽してしまうのである。

戦前におけるあからさまな人種主義的発想は鳴りを潜めているとはいえ、単一民族論をもとに構築された「日本人論」ブームの根底には、「世界に冠たる経済先進国」へと上り詰めた「日本人」の優秀性を誇示したいという願望が横たわっていたことは想像に難くない。そうであれば、誰と比べて「日本人」の「優越」を説くべきなのであろうか。「日本人」を単一民族とみなす立場上、日本人論における「日本人」の「優越」の根拠は、「日本」の外部に求められなければならない。そのために必要とされたのが、日本人論の中で「日本人」の「〈他者〉として強力に設定・位置づけられ¹⁸」た「外国人」であろう。

ここで再度、日本人論と「ハーフ」の流行が時を同じくして生じた現象であったことを想起したい。もし日本人論における「日本人」と「外国人」の単純化された二分法が、「その根拠を揺るがす「混血」の存在を無化・無視することで、あたかも説得的な言説として定立される¹⁹」のであれば、日本人論と同時期に生じた「ハーフ・ブーム」とはまさ

に、「日本人」と「外国人」の単純化された二分法の根拠を揺るがすものであったはずだ。しかし実際は、両者の共存共栄は可能であった。それはなぜであろうか。

おそらくそれは、単一民族論的を基盤に構想されているという点において両者が異曲同工の関係にあったためであろう。「ハーフ」とは「日本人」と「外国人」の単純化された二分法の根拠を揺るがすものでない。むしろ「日本人」と「外国人」という二項対立の強固な枠組みがあったからこそ、「ハーフ」という言葉が日本社会に容易に受け入れられていったと考えられるのである。

さらにまた、「混血児」＝「日本人の血」／「日本人の血」＋「外国人の血」＝「ハーフ(1/2)」という奇妙な図式にも、「ハーフ」と日本人論に共通する特徴を見て取ることができる。この図式を成り立たせているのは、日本人論に特徴的な「日本人の血」という人種的なメタファーだからである²⁰。

この観点からすると、単一民族社会観を基盤とする「日本人」の本質化と人種化、並びに「日本人」と「外国人」の単純化された二分法という日本人論に特徴的な構造を温存したまま、日本人論において捨象されていた「混血児」が可視化されたものが「ハーフ」なのだといえるだろう。

分子の1を問い直す―「日本的なもの」を構成する多様な要素

「ハーフ」という発想の問題点は、「単一」なものと想定された「日本人」と、その〈他者〉として設定された「外国人」とを下敷きにするその図式において、「混血児」が「日本人の血」や「日本人らしさ」を欠く存在として表象されてしまうことにある。この図式からは、「単一民族論」的発想のみならず、その根源にある優生学や人種主義的思想も見え隠れするのである。

「幻想されたアイデンティティ」に見える以下の言葉は、「ハーフ」という言葉に秘められたこの欠如・排除のメカニズムを的確にとらえている。

今日、「半分の」を意味する「ハーフ」という語が使われていることは、日本が自らを構成する複数性を奇妙にも十分に認識できていないということ、並びに、排除をもとに国家共同体を作ろうとする傾向があることを示している。それはさらに、外国人の親によって外部からもたらされる要素が欠落を生み出すということ、そしてその欠落は文化的ナショナリズムによって理想化され強化された日本性（日本的であること）を十分に備えていないことの証左とされることを示唆している。

それではどうすれば、この差別的構造を解消できるのであるか？この問題は、差別主義に抗するという『コミュニケーション』の要請に応じるうえでも、ぜひ答えなければならない問題である。

クレルクがその解決策の一つとして提示するのは、「単一民族論」的発想や「日本人の特殊性や単一性²¹」について問い直しを行うことである。換言すればそれは、「ハーフ」の欠落を示す図式において無条件に分子に置かれた一なるものとしての「日本人らしさ」、クレルクの用語によれば「日本性（日本的であること）」を問い直すことであろう。

クレルクがフィリップ・デスコラの「存在論的モデル」に言及するのもこの文脈においてである。そうすることでクレルクは、「日本的なもの」のを構成する複数の要素を示すと同時に、「日本」と「外国」あるいは「日本的なもの」と「日本的ならざるもの」といった二項対立の脱構築を行い、単一的・均質的で純粋な「日本」という「幻想」を払い除けようとするのである。

ここで補足的に述べておくと、デスコラの「存在論的モデル」とは、「存在論の方陣 le carré ontologique」と呼ばれるもので、人間と人間ではないもののあいだにおける差異と連続性を取りまとめたものである。エクアドルとペルーの国境付近に暮らすアシュアール族と生活を共にしたデスコラは、自然と文化の対立は西欧にしか存在しないという確信を抱くに到り、この原則のもとで独自の思考を展開する²²。「存在論の方陣」もその一つであり、西欧的思考の産物である「野蛮／文明」の二項対立や心身二元論を脱構築するために編み出されたものである。この手法をもとにデスコラは、存在物のカテゴリー（動物、植物、人間、物など）に「特性を分配する」システムとして「存在論」を再定義する。その「特性」には、存在物に生氣と意識とを与える「アンテリオリテ（心性）」と、物質的・有機的次元を与える「フィジカリテ（身性）」とがあり、存在物に対するこれら二つの「特性」の配分からは「アニミスム」、「トーテミスム」、「ナチュラリスム」、「アナロジスム」という四つの世界観があらわれる（下図参照）。

フィリップ・デスコラによる「存在論の方陣」（イメージ図）

| P \ I | I | 1 | 0 |
|-------|---|----------|------------|
| | 1 | | totémisme |
| 0 | | animisme | analogisme |

I : Intériorité アンテリオリテ（心性）

1 : 連続、同

P : Physicalité フィジカリテ（身性）

0 : 非連続、異

（Philippe Descola, *La Fabrique des images : Visions du monde et formes de la représentation*, musée du quai Branly, coédité par SOMOGY EDITIONS D'ART, 2010. の

記述をもとに執筆者（櫻井）が作成。）

「アニミズム」は、「フィジカリテ」の違いを認めつつも、人間同様の「アンテリオリテ」を人間以外の存在物に与える存在論である。デスコラが生活を共にしたアシュアール族においては、女性は自身の耕作する野菜の母となり、男性は自身の獲物の義兄弟となる。東南アジアやアメリカ大陸の他の民族にも同様のケースがみられる。

「ナチュラリズム」は、人間のみが「アンテリオリテ」をもつとする存在論で、人間以外の存在物は人間同様の物質的条件下にあるものの、心的特性の欠如によって人間と区別される。15世紀の西欧で芽生えたこの存在論は、「フィジカリテ」が「アンテリオリテ」を駆逐するという過激な形で現在も進行中であり、それは「精神の物質への還元」という形で表現されている。

「トーテミズム」は、特性の分配を物語る創生神話に基づき、人間と人間以外の存在物に身的及び心的連続性をみとめる存在論である。この存在論においては、同一のトーテムに由来するものは同様の身体的特徴を分かち持つとみなされる。

「アナロジズム」は、存在物はすべて、心的にも身的にも独立したものとみなす存在論である。存在物が際限なく増加することへの不安から、アナロジズムでは、互いに異なる物質的・精神的同一性をもった存在物たちが類推によって結びつけられる。この存在論は、中国やインドといった巨大な文明の発祥地において支配的である。

このように、「アンテリオリテ」と「フィジカリテ」の分配の仕方に応じて異なる世界観とその描写が生じる。しかし、そこには差異が存在するのみで優劣は存在しない。「存在論の方陣」の内部に置かれることで、これまで支配的であった西欧的世界観は「ナチュラリズム」として局在化（local化）されることになる。こうしてみるとデスコラが「存在論の方陣」を編み出した背景には、かつて「他者」を差別・支配するための論理的根拠を提供し、人種主義的思想の強化に与してきた人類学的な知に対する反省が働いていたものと推測できる。

クレルクが「存在論の方陣」を引き合いに出すのも、「日本的なもの」を構成する多様な要素を展開し、単一的・均質的で純粋な「日本」という「幻想」を払拭すると同時に、人種主義的発想に基づく差別的な構造を脱構築するためである。しかしクレルクによる「日本的なもの」の方陣への振分けは、いささか性急で、今後さらなる精緻化が求められるであろう。例えばクレルクは「縄文人とアイヌ」を「トーテミズム」に分類しているが、その点には疑問が残る。確かに、一般的に「トーテム」とは、ある血縁集団と特別な関係をもつ特定の動植物や自然現象を指す言葉であり、同様の発想はアイヌの社会にも見出すことが可能である。アイヌの各家系の故人を代ごとにさかのぼっていくと、家系の祖となる祖先神に到達するが、この祖先神の正体は多くの場合動物（ヒグマ、エゾオオカミ、シャチ、ウサギなど）や自然現象（雷、火など）であり、家系ごとに祖先神の極秘の物語が伝承されているという²³。だが、こうした「祖先神」を「トーテム」とみなすとして、果たしてデスコラの「トーテミズム」の特徴である「同一のトーテムに由来するものは、同様の身体的特徴を分かち持

つとみなされる」という原則をアイヌの世界観にも適応できるであろうか。アイヌに特徴的なのはむしろ、文化的、経済的、宗教的な諸側面においてアイヌ社会の中核をなす行事である「イヨマンテ」を支えている、人間同様の内面を持ったカムイ（霊）が動物の姿を借りて人間を訪れるといった「アニミズム」的な世界観なのではないだろうか。

デスコラの提示するスキームを適用することの妥当性を含め、今後更なる検討が必要になるであろうが、「日本」を構成する要素の複数性、とくに「縄文人とアイヌ」のつながりに言及したこの個所は、クレルクの研究の新たな拡がりを見せる個所でもある。旧石器時代・縄文時代まで遡る「日本人」の起源に関する研究の発展は、今後「日本人」のアイデンティティのみならず、アイヌ民族のアイデンティティにも大きな影響を及ぼすことが予想されるためである。この観点より、以下、これまでの「日本人起源論」を概観し、それをアイヌとの関係においてまとめなおしてみたい。

これまでの「日本人起源論」

現代日本人の起源を巡っては、これまでさまざまな議論がなされてきた。今日の起源論につながる議論が開始された明治時代にあつては、石器時代人（縄文人）をアイヌとみなすフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796-1866) や小金井良精の説が、プレ・アイヌ（＝コロポックル）の存在を唱えるエドワード・モース (Edward Morse, 1838-1925) や坪井正五郎の説よりも優勢であった。ただしこれらの議論は、石器時代人をアイヌとみなすか否かという違いはあるものの、渡来人が先住民を駆逐するという「人種交替説」に立脚する点において共通していた。

大正時代に発表された鳥居龍蔵の「固有日本人説」もまた、人種交替説を基本概念としつつ石器時代人をアイヌとみなす立場よりなされたものである。縄文は先住民であるアイヌの文化、一方弥生は沿海州、朝鮮半島から渡来した人々（固有日本人）の文化であり、その後も時期や源を異にする渡来と混血の結果、今日の日本人が成立した、というのがその説の骨子である。

鳥居説は発表と同時に多くの賛同者を得たが、この時代には既に、発掘調査の進展ともあいまって、縄文と弥生を不連続な別系統のものとして明確に区別することに疑問が持たれはじめていた。こうした風潮のなか、日本人の祖先を後来の渡来人ではなく、もともとこの列島に住んでいた石器時代人に求めるべきだとする「原日本人説」が提唱されるようになる。その中心にいたのが清野謙次と長谷部言人であった。

清野は、統一された計測法と統計手法を駆使した人骨の分析をもとに、現代日本人もアイヌも原日本人とでも呼ぶべき石器時代人（縄文人）を土台とし、その後の進化と隣隣集団との混血効果によって生み出されたと結論した。清野のいわゆる「混血説」に対し、長谷部の「変形説」は、人骨の緻密な観察と進化学的な視点をもとに、日本人は、アジアの更新世人類から日本の石器時代人へと進化し、その石器時代人がまた生活文化の変化と連動しながら弥生人になり、さらには古墳人を経て現代日本人に至ったとするものであった。長谷部は、

縄文人から古墳人への大きな形態変化を、清野の唱える異人種との混血効果を想定することなく、この間に生じた文化的な進歩をもとに説明しようと試みたのである²⁴。これに対して清野もまた、皇民化政策が本格化するなかで、「混血」の評価を小さくする方向で自説を修正していったことが指摘されている²⁵。

戦後、長谷部の「変形説」は鈴木尚によって継承された。長谷部の時代よりもはるかに充実した人骨資料の観察に基づき、鈴木は「日本人は太古の昔からこの地に住んでいた人たちが、その形質に影響を与えるほどの混血を受けることもなく、時代の推移にともなう文化の発展に付随して変化しながら、今日の日本人に至った」と結論したのである。しかし鈴木はこの「小進化説」は、その後の研究から複数の渡来の波があったことが明確になったため、今日では否定されている²⁶。

1980年代に至り、様々な時代の遺跡から発見された人骨の統計的な研究を行った山口敏や埴原和郎によって、現代版の混血説である「二重構造説」が定式化された²⁷。旧石器時代人につながる東南アジア系の縄文人が居住していた日本列島に、東北アジア系の弥生人が流入して徐々に混血して現在に至る、というのがその概要である。「二重構造説」は今日主流の学説となつてはいるものの、調査の進展に伴い、その問題点もまた明らかになってきている。例えば、「二重構造説」発表時には、新人の「多地域進化説」が定説とみなされていたが、今日ではアフリカでの化石人骨の再検討とともに現代人のDNA分析が進んだことにより、「新人のアフリカ起源説」が定説として受け入れられている。結果として、日本人の起源の解読にはアフリカから拡散した人類の長い旅路のシナリオの一部を構成するという視点が必要になったのであるが、「二重構造説」はこの部分に関する検証が不十分であることが指摘されている。さらに、日本列島と南西諸島の地理的な広がりや、生活環境の違いを度外視した「均一な縄文人社会」というあやふやな前提に立脚している点もまた「二重構造説」の問題点として指摘される²⁸。

こうした問題点を解消する方向で「二重構造説」を継承・発展させたものが斎藤成也の「日本列島人形成の三段階渡来モデル」である。日本列島人が祖先から受け継いできたゲノムの多様性に関する最新の知見を踏まえて提唱されたこの仮説の特徴は、「二重構造説」でひとつと考えられていた新しい渡来民が、第二段階と第三段階に分けられていることである。これにより、第一段階（旧石器時代・縄文時代）に日本列島の南部・中央部・北部に渡来した人々が、第二段階、第三段階で渡来してきた人々との混血の度合いによって、「オキナワ人」、「ヤマト人」、「アイヌ人」という三人類集団を形成していく様子が描写されるのである²⁹。

「日本人起源論」の中の「縄文人とアイヌ」

ここまで明治から現在に至る日本人起源論の展開を概観してきたが、その黎明期にあって、アイヌは現代日本人の祖先によって駆逐された先住民族として位置づけられていた。しかるに、その後登場した清野と長谷部の「原日本人論」は、「列島の石器時代人は蝦夷＝アイヌだという、鳥居などの当時の定説の否定³⁰」を目指すものであった。この点について哲学

者の梅原猛は、「二重構造説」の提唱者である埴原和郎との対談において、「[[清野の] 混血説が出てくるとアイヌの問題が少し薄れてくる。また [長谷部の] 連続説が出てくると、ますますアイヌの問題が忘れられていく^{31]}」と述べている。清野と長谷部の二人の学説が戦後の単一民族神話の成立に重大な役割を果たしたことは本解説でもみたとおりであるが、梅原の指摘を敷衍するのであれば、その神話はアイヌの忘却の上に成立したものだのである。

長谷部の説を継承した鈴木「小進化説」は、日本人の生き立ちを説明する代表的な考え方として支持を広げていったが、その背景にも「戦後の日本に定着した日本人の単一民族神話」の影響があったことが指摘されている³²。その発表年が 1969 年であることを考え合わせると、鈴木「小進化説」はそれに続く 1970 年代の「日本人論」ブームに「科学的」な根拠を与えながら、「単一民族神話」の強化に与したものと想像される。しかし、「アイヌ人」や「オキナワ人」への考察が欠けているという事実そのものが、今日、長谷部と鈴木「小進化説」が否定される一因ともなっているのである³³。

1980 年代に定式化した「二重構造説」では、長谷部の「変形説（連続説）」や鈴木「小進化説」に欠落していた「アイヌ人」や「オキナワ人」に対する視点が回復されている。例えば「二重構造説」では、北海道と南西諸島の住人の見た目の類似性が縄文人の影響によって説明されるのである³⁴。しかし現在では、本土日本、アイヌ、琉球の 3 集団のミトコンドリア DNA ハプログループ頻度は互いに異なっており、特にアイヌと琉球集団の間に類似性が認められないことが確認されている³⁵。つまり「二重構造説」では、アイヌと琉球集団の類似は説明できても、その相違をうまく説明することができなかったのである。

斎藤の「日本列島人形成の三段階渡来モデル」は「アイヌ人」「ヤマト人」「オキナワ人」という日本列島人類集団の形成と相違を説明するために提唱された仮説である。それによると「アイヌ人」の特殊性は、ヤマト時代（2 世紀末からの約 600 年間）後半から平安京時代の初頭にかけて北海道の北部に渡来したオホーツク人と、第一波（旧石器時代・縄文時代）の渡来民の子孫のあいだの遺伝的交流に求められる。この仮説はまた、「アイヌ集団はおおむね縄文人に似ているとしているものの相違点も存在する^{36]}」という、1990 年代以降に行われた人骨の形態学的研究で明らかにされながらも「二重構造説」ではうまく説明できなかった事象を説明するものでもあった。

このように、最新の人類学研究は単一民族神話において排除されていた「混血」の影響を肯定的に評価しつつ、現代日本人を構成する複数の集団の成り立ちを明らかにしつつある。2019 年 4 月 19 日には、アイヌ民族を法律上初めて「先住民族」と位置づけたアイヌ新法が参議院本会議で可決され成立したが、この決定のうえで人類学が果たした役割は小さくないであろう。今日の人類学研究は、「文献的には 13 世紀にまでしかさかのぼることのできないアイヌの人々の起源について、彼らが北海道の縄文人につながる先住民族である^{37]}」ことを明らかにするとともに、アイヌ民族の過去の究明とアイデンティティの再構築にも貢献しているのである³⁸。

まとめ

アイヌ新法の成立に僅かに先立つ 2019 年 4 月 1 日、新たな在留資格「特定技能」を創設し外国人労働者の受け入れを拡大する新制度が日本で開始された。政府は当初、5 年間で最大約 34 万 5 千人の受け入れを見込んでいたものの、2021 年 6 月末時点での受け入れ数は 29,144 人とどまっている³⁹。この人数が将来的にどう推移していくかは明らかでないとはいえ、少子高齢化に伴う労働力人口の不足が焦眉の問題となっている現状において、日本社会における移民の存在感が今後さらに増加していくことは間違いないであろう。

日本に暮らす外国人住民が増えれば、日本社会における「混血」もまた増加するであろう。それにより、「日本人」のアイデンティティにどのような変化が生じるのであろうか。

現代を生きる「日本人」は、自分たち自身が「混血」を通じて形成されたという最新の科学的知見を受け入れ、新たな「日本人」のアイデンティティの創発に積極的に加担するのであろうか。あるいは、今日もなお世界中で猛威を振るう COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の煽りなども受けながら、単一民族神話に基づく「幻想されたアイデンティティ」に固執したままナショナリズム的傾向を強化していくのであろうか。

今日、「日本人」のアイデンティティは、過去と未来からの大きな挑戦を受けているのだといえるだろう。

【参考文献】

- 網野善彦『列島の歴史を語る』、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2014 年。
- 梅原猛・埴原和郎『アイヌは原日本人か』、小学館ライブラリー、小学館、1993 年。
- 小熊英二『単一民族神話の起源—〈日本人〉の自画像の系譜』、新曜社、1995 年。
- 小熊英二『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』、新曜社、1998 年。
- 片山一道『骨が語る日本人の歴史』、ちくま新書、筑摩書房、2015 年。
- 金子遊『混血列島論—ポスト民俗学の試み』、フィルムアート社、2018 年。
- 川島 浩平、竹沢 泰子（編集）『人種神話を解体する「血の政治学を超えて」、東京大学出版社、2016 年。
- 斎藤成也『日本列島人の歴史』、岩波ジュニア新書、岩波書店、2015 年。
- サンドラ・ヘフェリン『ハーフが美人なんて妄想ですから!!—困った「純ジャバ」との闘いの日々』、中公新書ラクレ、中央公論新社、2012 年。
- 篠田謙一『新版日本人になった祖先たち—DNA が解明する多元的構造』、NHKBOOKS、NHK 出版、2019 年。
- 下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」—ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』、青土社、2018 年。
- 瀬川拓郎『アイヌ学入門』、ちくま新書、筑摩書房、2015 年。
- 瀬川拓郎『アイヌと縄文—もうひとつの日本の歴史』、ちくま新書、筑摩書房、2016 年。

瀬川拓郎『縄文の思想』、ちくま新書、筑摩書房、2017年。

内藤直樹・山北輝裕編『社会的包摂／排除の人類学—開発・難民・福祉』、昭和堂、2014年。

中橋孝博『日本人の起源—人類誕生から縄文・弥生へ』、講談社学術文庫、講談社、2019年。

永吉希久子『移民と日本社会—データで読み解く実態と将来像』、中公新書、中央公論新社、2020年。

藤村久和『アイヌの霊の世界』、小学館、1982年。

船曳建夫『「日本人論」再考』、講談社学術文庫、講談社、2010年。

『層—映像と表現』vol.3、ゆまに書房、2010年。

¹ 写真を媒体に世界中のハーフの連携を目指すプロジェクト Häfu2Häfu、サンドラ・ヘフェリン『ハーフが美人なんて妄想ですから!! —困った「純ジャパ」との闘いの日々』(中央公論新社、2012)、西倉めぐみ、高木ララ監督のドキュメンタリー映画『ハーフ』(2013)など。

² 「日本におけるアイヌの社会文化的変容」の内容をコンパクトにまとめなおした書物が、近く、フランスの国立科学研究センター(CNRS)から出版される予定である。

³ 例えば内藤直樹・山北輝裕編『社会的包摂／排除の人類学—開発・難民・福祉』(昭和堂、2014年)など。

⁴ 岡村兵衛「「ハーフ」をめぐる言説：研究者や支援者の著述を中心に」、『人種神話を解体する「血の政治学を超えて」(東京大学出版社、2016)。

⁵ 下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」—ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』、青土社、2018年、157頁。

⁶ 同上、136頁。

⁷ 小熊英二『単一民族神話の起源—〈日本人〉の自画像の系譜』、新曜社、1995年、360頁。

⁸ 下地、前掲書、136～137頁。

⁹ 小熊、前掲書、360～361頁。

¹⁰ 下地、前掲書、46頁ならびに137～138頁。

¹¹ 小熊、前掲書、31～32頁。

¹² 同上、287～289頁。

¹³ 同上、339～340頁。

-
- 14 同上、357 頁。
- 15 同上、235～270 頁。
- 16 同上、265 頁。
- 17 下地、前掲書、140 頁。
- 18 同上、138 頁。
- 19 同上。
- 20 「このような「日本人の血」という人種的なメタファーは、戦後日本社会における「日本人」の境界策定においても非常に効力をもっていた。そのため戦後に流行した「日本人論」においても、このメタファーは「単一民族」としての一体感や家族的なつながりを強調する上で盛んに用いられた」。(下地、前掲書、46 頁)
- 21 下地、前掲書、140 頁。
- 22 フィリップ・デスコラの詳しい経歴についてはリュシアン・クレルク「怒りの日—人類学と許しえぬもの」、櫻井典夫訳、『層—映像と表現』vol.3、ゆまに書房、2010 年、4～18 頁。を参照。
- 23 藤村久和『アイヌの霊の世界』、小学館、1982 年、28 頁。
- 24 中橋孝博『日本人の起源—人類誕生から縄文・弥生へ』、講談社学術文庫、講談社、2019 年、181～204 頁。
- 25 小熊、前掲書、263～270 頁。
- 26 斎藤成也『日本列島人の歴史』、岩波ジュニア新書、岩波書店、2015 年、24 頁。
- 27 同上、25 頁。
- 28 篠田謙一『新版日本人になった祖先たち—DNA が解明する多元的構造』、NHKBOOKS、NHK 出版、2019 年、154～158 頁。
- 29 斎藤、前掲書、167～172 頁。
- 30 小熊、前掲書、260 頁。
- 31 梅原猛・埴原和郎『アイヌは原日本人か』、小学館ライブラリー、小学館、1993 年、105 頁。
- 32 篠田、前掲書、152 頁。
- 33 斎藤、前掲書、24 頁。
- 34 篠田、前掲書、153 頁。
- 35 同上、157～158 頁。
- 36 同上、158 頁。
- 37 同上、210～211 頁。
- 38 縄文とアイヌのつながりが明らかになる中で得られた成果の一つに、アイヌ文化に特徴的な飼いグマ式イオマンテの起源について、新たな解釈の可能性をもたらしたことが挙げられる。2010 年に出版された『層』vol.3 (ゆまに書房、2010 年) に収められた拙稿「暴力とその禁止—「怒りの日」解説」を締めくくったのは以下のような文章であった。「クマの霊送り儀礼、とりわけ世界でも珍しい飼いグマ式の霊送り儀礼は、その起源をはじめ

め、いまだに謎が多いとされている。その儀礼の核心ともいえるクマ殺害の暴力も含めた包括的なイヨマンテ研究が、今後リュシアン・クレルクに期待される」。

それから10年たった今日、アイヌに特徴的な飼いグマ式のイオマンテは、北海道の縄文人が本州で行われていたイノシシ祭り（春先に入手した子イノシシを飼育して秋に殺す）を継承しつつ、北海道では入手困難なイノシシをクマによって代替することで生まれたとする仮説が提示されている（瀬川拓郎『アイヌと縄文』、ちくま新書、2016年、77～82頁）。

³⁹ 出入国在留管理庁ホームページ参照。

https://www.moj.go.jp/isa/policies/ssw/nyuukokukanri07_00215.html（2021年10月1日確認）